

# 七月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆

ムトウ・ダルゴバ 狩野 一男 東京

鳴子には篠弘氏が佐沼には武藤佐枝子氏 学童疎開

疎開先佐沼のことを快活に喋るを聞きき国際電話

我が読むさいこの歌か「赤ピーマン吊されてをりソフィア郊外」

ブルガリア国民としてねむれるやミセス・サエコ・ムトウ・ダルゴバ  
記憶せむ『マルテニツアを襟に』エスペランテイスト武藤佐枝子歌集を

戦争特需 島田 暉 神奈川

おのが児の泣き叫ぶ声聞きながらスマホ操る令和の女神  
家々は菜の花色の灯をともし戦あらずな令和の世こそ

焼夷弾の炎が舐める昭和町死にし子背負ひ逃げゆく母親  
白蔵の昭和の壁に残れるは機銃掃射に焦げし傷痕  
歌びとに戦争特需のありしことわれ忘れめや平和の世こそ

雌伏の時 藤野 早苗 福岡

かつを節湯に放ちたり厨辺に今は雌伏の時を遣るべく  
オンライン始めんとしてIDの下四ケタは1984

奔馬性肺労いかなる速度もて樋口夏子をさらひゆきしか  
文筆で糊口しのぐをあきらめてお齒黒どぶの内に商ふ

結核が死病でありしうつし世に一葉の美登利まつしろに咲く

やうかん讚 水上 比呂美 東京

宅配の直方体の重たさは金の延べ棒、あるいは砥石  
包装紙はアロエの更紗模様にて中身は金の箱入り羊羹

羊羹に黒曜石の光沢と極楽の果肉の舌ざはり

東大寺金剛力士像の阿の口に極上羊羹ひと切れ入れむ

極上の本煉羊羹「煉」の字に村上総本舗の矜持あり

☆ ☆



水島 晴子 兵庫

青き実をいくつかぎして枇杷の木は片山かげに葉叢にぎはふ  
感染を怖ちつつ入れる治療室に歯科医の微笑つねと変はらず  
朝昼夜体温計れと指示が出て有無をいはせぬ時間が流る  
肺病みし兄また母も憂ひつつ検温なしき時刻時刻に  
検温器腋したにしてそのかみの肺病みびとを独りしのべり

杜 沢 光一郎 埼玉

新型コロナウィルス蔓延しをり人種の差・言語の差などに拘泥するなく  
懦弱なる姿とぞ思ふ白いマスクで出あるくわれらホモ・サピエンス  
高熱で発症知らせたはやすく肺炎でコロナはヒト科殺しゆく  
生まれたからには何かで何時かは死ぬだらうが目に見えぬコロナなんぞに殺られてしまるか  
始めがあれば必ず終りがある筈なりしかれども終りは始めのはじまり

武 田 弘之 神奈川

エープリルフルと人の言ひ馴らす四月一日がわれの生日  
伝へ聞く親鸞上人の生日がわたしと同じ四月一日  
孫子らが企てくれし米寿会吹つ飛べり新型コロナ流行りて  
あと二年生きて卒寿会ひらかに楽しみ待ちてくれよ孫子ら  
三つの密避けつつ家に味気なし老いたる妻とこもる春の日

高野 公彦 千葉

年取れば脳が時どき寝てましてパスモたづさへATMに来つ  
遠負けといふ古語ありぬ老いを思ひ死を思ふとき遠負けするな  
血しぶきの上がることなく列島は静けさ深しコロナ禍の日々  
コロナ禍で渋谷開催を中止せしホキ美術館の口惜しさ思ふ  
不十分なれど一日働いた頭一個を枕に載せる

仲 宗角 三重

車椅子押ししてもらつて来し川辺白花の散りひとり見てあつ  
若き日の古傷がまた疼き出す学校やめると父がつけし下駄の打ち傷  
花冷えの昼の画廊をめぐりたりそのあとせせらぎの音を聞きたり  
花を終へそのかなしみをきざみたる傷だらけの青春ひきずりてきぬ  
何もせずたれとも会はず死のちかき母を見、母は吾を見てゐた

奥 村 晃 作\* 東京

『印象派物理学入門』読み継げり難解なれど子の本なれば  
数式は斜め読みして面白く読まず箇所のみ楽しみに読む  
数式は使わず物理の世界をば解き明かす本次には書く  
ドウジエン又継ぐ物理の道を『印象派物理学』とぞ子は名付けせり  
文系の我には理系の物理なぞ分からねことが分かつてわびし

森 重 香代子 山口

山の墓地供花みな素枯れ風に鳴る彼岸を過ぎて訪ふ人のなし  
花の塵いくところにも掃きたためて寺男をり夕づく頃を  
掃き寄せて夕べの寺に花を焚くところを過ぎて万骨の塔  
番菜の清白菜さげ戻りゆく山の家居や歩度はかどらず  
木斛の葉先に宿る雨しづく仏間の障子ゆふべ開ければ



桑原正紀 東京

歩かねば見えないもののあることを知りぬ一駅先まで歩き  
沿線のひとつひとつの家のもつ生活の顔あるをたのしむ

「ヘイカとはどんな字？」と訊かれすらすらと「陛下」と書きて何かかなしも  
「陛下」といふ字を教へたるわれのこと十歳の記憶に残らむあはれ  
歴代の天皇の名をそらんずる先生のゐてわれは崇めき

宮里信輝 神奈川

パンデミックの今年の春は籠居なりせて散歩でさくら三昧  
早く咲き雨にも風にも負けず咲きエールをくれる今年のさくら  
晴れ桜、曇り桜に、雨桜、寒波の今日は嗚呼「雪桜」

最後なるさくらはなびら見送りぬ「緊急事態宣言」続く日

第三次世界大戦の敵なるはマイクロナウ型コロナウイルス

岡崎康行 新潟

風が吹き雨は降れどもウイルス無き空気の中に繭ごもりせり  
ウイルスも人と一緒にくると言ふ種時くやうなもんなんだつて  
数回の輸血をしたる血液がわれの体のすみずみをゆく

ストーブに灯油詰め終へしわれの影ペランダの闇がふつと呑み込む  
ウイルス禍の不穩に揺れるほとりにて太りつつあり真冬のいちご

小島ゆかり 東京

ウイルスの衰へを待つこの春もふたたびはなし熊蜂うなる  
金毛きんもうのせなか息つき蜜を吸ふ熊蜂に朝の太陽は照る

パンデミックのひびき弾めりはじめから人を踊らす言葉のごとく  
老人を子どもを守らねばならぬ介護者保護者守られたきを  
まればとのコロナウイルスの貌とおもふスーパーマン赤銅のいろ

日影康子 富山

植多捨ての庭の繁みのチューリップか細き紅白を風雨いたぶる  
会ひしことなけれど悲し愛読書「詩歌の森へ」の芳賀徹逝きます  
チューリップ惜しまず切りて眺めよと部屋へ活けくるる子の妻の笑み  
訪問入浴のスタッフ三人仕事終へベッドの夫と別れの握手  
聴こゆるは耳鳴りばかり寺奥の離れにこの世の物音絶えて

古屋祥子 群馬

群れなして暮らす子秩序あり 線にも輪にもみんな仲良し  
見たことも無い文字あまた続くなり般若心経毛筆で書く  
あしたへと繋げるための出しつ放し、原稿もペンもそのままに寝る  
食事作り娘にまかせその味はともかく完食の日々つづけをり  
いくさの日、焼け跡整理、父の死ともう戻らないわれの青春

影山一男 千葉

改元に湧きたちし去年思ふがに花みづき照る無限の白に  
太宰府の梅もしづかに眠りおむ令和二年の冬過ぎて春

葉桜の輝きの中くぐり抜け出会ふ晩年生あらたなり

休館の図書館に羽とざしたる言葉をおもふ夜更けて思ふ

SNSなければ歌ふほかなくて風の行方を目守りゐるのみ

木 畑 紀 子 京 都

散るさくら揺るるなのはな無音にて不穩の春のひかりをまどふ  
五千歩をあるいて不安の塵おとす白玉椿のさくところまで  
藁つかむやうな光明射すやうな駝鳥博士のウイルス対策  
感染症死者数殖ゆる刻々に心戒上人の蹲踞おもほゆ  
古びとは露のいのちと教ふれど地に一粒の麦と落ちたし

大 松 達 知 \* 東 京

はんぺんを指でちぎつてぬるぬるとこれは人肉ではない元は肉  
いまわれは飲み食い終わりちんまりと領収書とる五分前の人  
デモ隊の脚を狙つて撃つという軍のことガザという土地のこと  
歩けなく、一生歩けなくすれば、殺すよりずっと良いのだとい  
う干からびたイチジクなればその種は散弾銃の弾のごとあり

田 宮 朋 子 新 潟

山あひの畑の桃は年十日ほどあてやかな花衣着る  
披露宴延期となれど結婚式しづかにすすむコロナ禍さなか  
底砂に炎のごとき影ゆれて一たばの水溪間をくだる  
流されつつぼんやりとした不安ありこの急流の先にある滝  
バイオリン工房いかにコロナ禍の北イタリアのクレモナ映る



津 金 規 雄 神 奈 川

冷えびえと純白の時逝かせつつ聴く、弦楽のためのレクイエム」  
雪残る二月二十日ぞ武満の死を知りし日の夜のほの明かり  
二人してのアパート住まひ如月の寒気のうちに水仙匂ひき  
武満の逝きし齢を過ぎんとしわが悔恨の過去の日ばうばう  
何よりも風に近きか春寒く、ノヴェンバー・ステップス」独りし聴けば

小 山 富 紀 子 京 都

ウン、ウンと共に力めば「咲けたあ」と開花しさうなさくらをつぼみ  
それぞれに鬚眉のさくらありましてあれぞこれぞと盃はづむ  
御堂の扉鎖す音ひびき満開のさくら散るなりひとひらみひら  
夜をこめて散る花の音聞きますやわが守り仏毘沙門天王  
追ふ背中ありたりし日のしあはせよさくら茫々ばうばうと散る

清 水 正 子 神 奈 川

月遅れなれど雛の日を明るくす邪気はらふ桃花もも活けしばかりに  
飾りたる大内雛のおちよばぐちコロナ疲れの日々を問ひたげ  
木でありし日の仏性をそなへぬむ大内塗のまあるいお雛さま  
瑠璃光寺古塔のもとに尋ねしよ若き牧水の「はつなつ」の歌碑  
帆走のヨットさながらの碑にきざむ喜志子夫人の筆は慎まし

小 嶋 一 郎 佐 賀

「鼻毛まで白くなった」と言ふ友に「俺も」と嗤わらひ追つ追つたり  
拇指おやめびに唾つけページ繰る癖に気づきしこともコロナ禍の所為  
亡き母の昭和の緋みづからがたたみたるまま箆筒に残る  
蟪蛄の昇り詰めたる野あざみに黒揚羽来てなにごともなし  
われよりも老いたる顔を見ず巡る四衢八街の博多中洲を



田中愛子 埼玉

マンシヨンのエレベーターに備へらるボタン押し用綿棒二箱隣室にテレワークする人あればわれもテレビを少し控へたり背伸びしてしゃがんで立つて春の日を夫の書架に『ベスト』をさがすうれしみでまたさびしみて思ひ出づ今は会へざる人の声ごゑ晩春のひとひの昏れを不織布のマスクややはり押し洗ひせり

橘 芳 園 新潟

かんぢやうに自分を入れぬ賢治には遠きわれなり長生きませむ  
廩仏で寺を棄てたる祖を持つ知友はだれも穩しかりけり  
骨をくだきても身を粉にしても謝すべしと恥しうたひき法会のために  
酒徒なりし叔母にてありきわが歌を「ああ、しんきくさ」と評せしならむ  
運悪くレールの真下となる小石列車くるたび重さをかづく

鈴木竹志 愛知

ポルタレンテープを貼りてひとまづはこの腰痛をなためむとする  
腰痛に最も良きは散歩なりと説かれ信じて散歩に精出す  
たんぼ道ゆけば椋鳥、雲雀らの迎へもありてあいさつ交はず  
鳥の名を十くらゐは言へたかなけふの散歩の収穫とせむ  
窓辺より雲の往き来を見てをりぬ面倒なこと片をつけ終へ

原賀環子 東京

ああ春の雪だね三島由紀夫だね 子のふりあふぐ三月の雪  
藤の花ふつさり咲けりペランダの柵の内にも外にも垂れて  
烈風に、ふさ細るまで抗へばけふ惚れなほす藤のふさばな  
あるはずの文庫『ベスト』が見つからず夕さりつかた納戸をさがす  
再読の動機あやふしコロナ禍で『ベスト』を読めば遠ざかるカミユ

後藤美子 北海道

朝毎に洗ふ紅茶のガラスポットうす茶色の線カップ二杯分  
礼拝に向ふ途中に轢かれたる弊衣のガウディと知りてかなしむ  
どこかズレてゐると思ふのみマスク二枚現金十万円急ぎ配らんと  
生み終へしのち死にゆける親鯉が岸边に降りし鳶の餌となる  
こよひまたことなくここに眠りなむ駱駝模様のベッドカバー掛く

福士りか 青森

ああ、あれは春の流灯ゆふぐれの川にしづけき白鳥の群れ  
灰色の羽ときどききふるはせて若き白鳥餌に近づけず  
若鳥を押しつけパンをついばめる白鳥 まもなく旅立ちの時  
指に残るくちばしの濡れ白鳥は一瞬にしてパンを持ち去る  
子どもらに飴まき散らす米兵の笑ふ写真を思へり ふいに

風間博夫 千葉

上の前歯二本ぐらぐらして抜けた四十年間差したる差し歯  
差し歯する箇所型取り五分間歯科衛生士の指が押さへる  
野の涯にレールのびゆき陽炎のゆらゆらとしてレールのびゆく  
ゆらゆらとゆらゆらと片脚立ちのわれゆらゆらとしてGパン穿けず  
朝早き小公園にボール打つゲートボールの音がびびきぬ

水上 芙季 東京

ウイルスの気配なければと離れ待つ枝にたわわな桜撮るため  
マスクして初めましてもままならず仕事してをり 顔を知らない  
長い夢かとも思へりバラエティ見つつ新型コロナもあの死も  
新型コロナ感染者日々増えゆけり 家の中から青空を見ぬ  
約束のない毎日はシンプルで具だくさんスूपつくつてゐます

大野 英子 福岡

大雨ののち街川に塵芥あふれるコロナは蔓延しゆく  
背筋に悪寒が走る志村けん死亡のニュースがスマホに現はれ  
ひらききりはらり零るる鬱金香の果敢無さに似るひとののちは  
ビル風が鳴り止まぬ春の家籠りかかる不安を弥増しに増す  
ガラス壁の碁会所の灯は消えしまま打ち姿美し人ぞ懐かし

松尾 祥子 東京

感染者日ごと増えゆく秋津島大和の国を地震も揺らす  
子の麻酔醒めゆく頃か一歳の孫と一番星を仰ぎぬ  
「ご飯だよ」声をかければ一歳が九十一歳の手をひきて来る  
一歳と三十歳と六十歳そろひのマスクして町をゆく  
一歳に拍手されつつブランコをぐんぐん漕げば空が傾く



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八―一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一―二二―二〇

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三―六―三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一―一四―六